

仙台藩茶道の茶道頭・宗家の継承 とその印の三種の文獻



石州流清水派宗家十世

大 泉 道 鑑

初めに、当流（石州流清水派、後に道門派とも言う）が仙台藩に確立していった経緯を簡潔に述べたい。仙台藩の茶道は、その当時茶道の第一人者であった織部流の流祖古田織部の高弟である一世清水道閑が、仙台藩の藩祖伊達政宗公によって破格の待遇（元日着座）で京都から招聘されたことに端を発している。その跡には、三代將軍徳川家光公の茶道師範を務めた石州流の流祖片桐石見守貞昌公（石州公）の高弟の二世清水道閑が仙台藩茶道頭に任ぜられたが、元禄五年（一六九二）にその後継者には四代藩主伊達綱村公の命により、二世道閑の嫡子の清水快閑ではなく、弟子の中でずばぬけて優れていた馬場道斎（後に三世清水道竿と改めた）が指名された。

その三世道竿は、二世道閑の著書「二世清水道閑註解石州流三百箇條」（三冊）及び「動閑茶湯書」（十八冊）の理念を基本に据え、さらに創意工夫を加えて石州流清水派の基盤を築き上げていった。以後、それが仙台藩茶道の正式な流儀として四世清水道簡から八世清水道鑑までの歴代の茶道頭へ伝えられた。明治の廃藩置県により、禄を離れた八世道鑑は石州流清水派の宗家として一門の指導に専念し、その茶道の真髄はその後継者となった私の実母九世落合道鑑を経て、十世の私の代まで連綿として引き継がれて来た（図一）。一方、三世道竿は伊達家の家臣達だけではなく、幕府数奇屋方、旗本、他藩の家臣達にも茶道の指導を熱心に行なったため、石州流清水派の流儀は広く各藩に伝えられ、それぞれ独自に発展していった。このような経緯から、三世道竿は石州流清水派の祖と言われており、当然その一世と称しても良いと思われる。しかしながら、三世道竿は仙台藩主の茶道の指南役と言う大役を果たす事が課せられている仙台藩茶道頭を二世道閑から引き継いだ者として、三世と称したのは極めて妥当な判断であったと言える。

仙台藩茶道頭

清水道閑(二世)―動閑(二世)―

道竿(三世)―道簡(四世)―道斎(五世)―

仙台藩茶道頭・宗家

道看(六世)―道幹(七世)―道鑑(八世)―

宗家

落合道鑑(九世)―大泉道鑑(十世)

図1. 仙台藩茶道系図(茶道頭・宗家)

藩祖政宗公以来、仙台藩では、学芸・芸術の師には、当時一流の人物が任ぜられて来た。我国でも有数の大藩であった仙台藩の歴代藩主の茶道師範という大役を果たす茶道頭には、並みの人物では到底務まらないと思われる。そのため、茶道頭の後継者を選考する場合には、必ずしも実子を選ばれるとは限らず、藩主の意思が尊重され、多くの弟子の中から最も傑出した人物が任命されて来た。このことは、当流のひとつの大きな特徴と言え、特に、茶道頭一世道閑から五世清水道斎までの時代に顕著に見受けられた。

ところで、藩主の命により、三世道竿が茶道頭二世動閑の跡を継ぐ際に、石州流清水派の經典とも言うべき二

世動閑の著書「清水動閑註解石州流三百箇條」及び「動閑茶湯書」に加え、二世動閑筆の掛軸「渋紙庵之記」が授けられたと言われている。この二世動閑の著書と掛軸は、同様にして三世道竿から茶道頭を継いだ印として、四世清水道簡へ引き継がれた。四世道簡は、その後継者の茶道頭五世道斎に代を譲る時には、その印として前に述べた二世動閑の著書及び掛軸に加え、自分自身が入手して大切に所持していた老中松平周防守康福公筆の掛軸「片桐石見守宗閑居士像」(図2)も手渡した。これ以降、仙台藩茶道頭を継承する際には、その印として「三種の神器」とも言うべきこれらの三種の文献がその都度後継者に引き渡され、仙台藩の最後の茶道頭を務めた八世道鑑まで受け継がれて来た。明治に時代が変わると、当然当流が仙台藩の庇護を受けられなくなったが、八世道鑑は、茶人の道を全うし、藩政時代に続けられて来た伝統を些かも変える事なく守り抜いた。当流の宗家の継承の際にも、八世道鑑は晩年、前に述べた三種の文献にそれぞれ水引を掛け、当時一門で最も優れた人物であった九世道鑑に、当流の宗家の跡を継いだ印として、直接授け、自分の後継者に指名した。



図2. 老中松平周防守康福公筆「片桐石見守宗閑居士像」の掛軸（十世大泉道鑑所蔵）

さて、昭和三十六年九世道鑑から私に宗家の代が譲られた際にも、全く同様な儀式によってこれら三種の文献が授けられたが、この時の事が昨日の出来事のように脳裏に鮮明に焼き付いている。このようにして、私が当流の宗家を引き継いでからは、茶道の研鑽により一層励まなければならぬと考えると共に、これらの文献を研究し、その真髓を弟子たちに正しく伝えると言う重要な責任が課せられたと感ずる毎日であった。そこで、その責任を果たす事の一環として、これら三つの文献の解読を進めると共に、仙台藩茶道の歴史に関する多くの文献及

び資料を詳細に調査・研究して、この成果を「清水動閑註 解石州流三百箇條付仙台藩茶道」（十世道鑑著、丸善出版サービスセンター）にまとめて出版した。

前に述べた三種の文献それ自体は、その重要な役割から、当然ながら長い間門外不出とされて来たので、原則として

一般に公開されることはなかった。特別な例として、最近では今から十二年前に開催された仙台大会（第八回石州流全国大会）の研究會及び歓迎茶會において、「片桐石見守宗閑居士像」及び「洪紙庵之記」の二幅の掛軸がそれぞれ掛けられた。また、今回の第二十回全日本石州流茶道協會仙台大会では、前者の方の掛軸と共に、前に述べた二世動閑の著書が飾られる予定である。

ところで、「片桐石見守宗閑居士像」の掛軸は天下第一品であるため、当流だけではなく、広く石州流茶道全体にとっても重要な文献であるとされて来た（「大和郡山

市史」参照)。この掛軸には石州公の像と共に、次のような禅語と和歌が記されていた。そこで、故佐川修東北大学名誉教授にその解釈を依頼し、これを前に述べた私の著書に掲載したので、その箇所をそのまま次に転記する。

萬里一條鐵

何事もおもはてくらす おもかけに

むかひてもまた なにか思はん

〔註〕

萬里一條鐵 — (出典)『景德伝燈録』。これは宋の真宗皇帝の景德元年(一〇〇四)に道原が編したもの。

禅宗の伝統を列叙した。三十卷。(引用)道元の『正法眼蔵』や白隠慧鶴の『槐安国語』などにこの「萬里一條鐵」という禅語が引用されている。我国ではたいてい原典によってではなく、これらの引用書によってこの語を知ったと思われる。(意味)すべての現象は時々刻々に変化していくが、その根本にある真理(実相)は一萬里にわたってひとすじにつながっていく鉄のように過去から現在へ、現在から未来へと永遠に連

なっていること。現象面はたえず変わるが、それをささえている道は不変であることを一萬里に一貫する鉄線によってたとえた。

おもかけ—面影。想像や思い出の中にありありと現れる人の顔や姿のこと。それは愛する人(恋人、家族)である場合が多く恩愛の情によって心が乱れることが多い。

〔通釈〕

私は「萬里一條鐵」の心境であるから、現象界の何事も思わず(従ってそれにわずらわされず)心安らかに毎日を送っている。時に愛する人の面影が頭の中に浮かぶことがあっても、それに向かってあれこれと思わずらうことなくそれを超越して安らかである(現象の世界にとらわれれば心は乱れて平静ではありえないが、道の真実(実相)に徹すれば何事にも心は乱されないという意味)。

次に、「片桐石見守宗閑居士像」の掛軸の筆者である老中康福公(享保四年〜寛政元年、一七一九〜八九)に

ついて簡単に紹介したい。康福公は、石見国浜田藩主松平康豊の長男で、元文元年（一七三六）に十八歳で襲封し、従五位周防守に叙任された。その後、寛延二年（一七四九）に奏者番、宝暦九年（一七五九）寺社奉行、同十年大坂城代の要職を歴任した。更に、同十三年本丸老中、天明六年（一七八七）老中首座に任ぜられ、江戸幕府（政権）の中枢に上り詰めた。康福公は、天明八年老中を退き、寛政元年（一七八九）二月八日江戸で没す。享年七十一。法名は、自通院殿従四位侍従前周防守靈誉冲寂妙閑大居士。墓は、島根県浜田市長安院に在る（島根県史、新修島根県史参照）。

以上述べてきた事に、私が九世道鑑から直接伝え聞いた事柄を加えて総合して考察すると、歴代の仙台藩茶道頭を経て九世道鑑から私に直接譲られたこれらの三種の文献（『三種の神器』）には、当流の茶道頭・宗家を継承する際の、単なる跡を継ぐ印としての意味に留まらず、次の二つの深遠な意義があると思われる。先ず第一に、これらの文献には江戸時代では藩主は勿論の事、歴代の茶道頭の期待を担ったこの古き伝統のある石州流清水派の指導者として、その茶道の真髄を弟子達に伝える重責

を自覚することを促す意味が込められている。第二に、それと同時に、次の時代を担う後継者を全力を尽くして育成し、仙台藩のこの正式な茶道と共に、これら三種の文献を正しく引き継がせると言う責任を自覚させる願いも併せて込められていると考えるに至った。

なお、今回紙面の都合で詳述できなかった「二世清水動閑註解石州流三百箇條」、「動閑茶湯書」及び「渋紙庵之記」については、次の機会に説明できれば幸いである。

